

車僧

世阿弥作

季は	地は	シテ	ワキ	後	シテ	ワキ	前
冬	山城	太郎坊	前に同じ		山伏	車僧	

「後の世かけて車僧。／＼。常寐の眠りいつまで。

歌
「降り曇る。空は小倉の嶺の雪。／＼。散るや嵯峨

野の嵐山。滝の響も声添へて。重なる雲の大井川。
筏の床の浮枕。片敷く袖も白妙の。空も程なく廻
る日の。西山本に着きにけり。／＼。

詞
「暫く此所に車を立て。四方の氣色を詠めうずるに
て候。

シテ詞
「如何に車僧。

ワキ詞
「何事ぞ。

シテ
「浮世をば。

ワキ
「浮世をば。

シテ
「浮世をば。何とか廻る車僧。まだ輪の内に在りと
こそ見れ。

ワキ
「浮世をば廻らぬ物を車僧。

詞
「乗りも得るべきわがあらばこそと云ふは誰そ。

シテ
「乗りも得るべきわがあらばこそと云ふは誰そ。

ワキ 「空堂風涼し。」

シテ 「我名のみ高雄の山に言ひ立つる。」

ワキ 「人は愛宕の嶺に住むな。」

シテ 「さて御僧の住家は。」

ワキ 「一所不住。」

シテ 「車は如何に。」

ワキ 「火宅の出車。」

シテ 「廻れど。」

ワキ 「廻らズ。」

シテ 「押せど。」

ワキ 「押されず。」

シテ 「引くも。」

ワキ 「引かれぬ。」

シテ 「車僧の。」

地 「三界無安猶如火宅をば。出でたる三つの車僧かな。
廻るも直なる道なりけり。あふ乗り得たり乗り得

たり。

地「見聞く人。心空なる雲水の。く。深立つ空も
冷ましく。嵐も声々に愛宕山。嶺とよむまで響き
合ひて。車路は無けれども。我住む方は愛宕山。
太郎坊が庵室に。御入りあれや車僧と。呼ばゝり
て夕山の。黒雲に乗りて上りけり。く。(中入)
後ジテ一聲「愛宕山。檣が原に雪積り。花摘む人の跡だにもな
し。

詞
「實に雪中に山路なし。さて車輪は如何に車僧。我
程貴き者あらじと。慢心の心路跡なからんや。然
らば無着法欲心に。引くか移るか車僧。魔道にも
心を寄せよ車僧。

地「善惡二つは両輪の如し。

シテ「仏法あれば世法あり。

地「煩惱あれば菩提あり。

シテ「仏あれば衆生もあり。

地「車僧あれば。

シテ「太郎坊の行者も有り。

地「祈らば祈るべし。行ぜば行徳も。劣るまじとよ

く。いざ車僧行くらべせん。

ワキ詞「如何に汝妨ぐるとも。それには寄らじ争はじ。我

はもとより不増不減。あらおもしろの時節やな。

シテ詞「実におもしろき時節ならば。雪中に車を廻らし。

嵯峨野の原にいざ遊ばん。

ワキ「遊ばゝ遊べ糸ゆふの。我心をば引かれめや。

シテ「などかは引かで有るべきと。標を振り上げ車を打つ。

ワキ「あふ車を打たば行くべきか。牛を打たば行くべしや。

シテ「實にく車は心なし。さて牛を打たんも有らばこそ。

ワキ「愚や汝人牛の道。見えたる牛をばなど打たぬ。

シテ 「見えたる牛とはさて如何にそもそも人牛は。

ワキ 「打つとも行かじ。

シテ 「さて御僧の打たば行くべきか。

ワキ 「中々の事。いでくさらば露地の白牛を打つて見せんと。払子を上げて虚空を打てば。

地 「不思議やな此車の。く。ゆるぎ廻りて今までには。足弱車と見えつるが。牛も無く人も引かぬに。易々と遣りかけて。飛ぶ車とぞなりたりける。

ロング地 「小車の。山の蔭野の道すがら。法の道の辺遊行して。貴賤の利益なすとかや。

シテ 「所から。こゝは浮世の嵯峨なれや。雪の古道跡ふかき。車のわだちは足引の。大雪にはよも行かじ。地 「實に雪山の道なりと。法の車路平らかに。

シテ 「行くか行かぬか此原の。

地 「草の小車雨添へて。

シテ 「打てども行かず。

地「とむれば進む。

シテ
「此車の。」

地「法の力とて。嵯峨小倉大井嵐の。山河を飛び翔つて。眩惑すれども騒がばこそ。誠に奇特の車僧かな。あら貴や恐ろしやと。魔障を和らげ大天狗は。合掌してこそ失せにけれ。」

底本：国立国会図書館デジタルコレクション「謡曲評釈 第五輯」大和田建樹著